

〈東西の融合〉日本の題材をヨーロッパ音楽で成就させる

楽劇《白峯》は、上田秋成の『雨月物語』に題材をとり、作曲家・丹波明が西洋音楽の原則と、世阿弥によって完成された能楽の序破急原則(森羅万象の変化に結び付いた時間制御の美学原則)とを融合させた〈序破急書法〉によって書かれた現代オペラとして21世紀の日本に誕生しました。

平安貴族の政権から鎌倉の武士政権への大転換期に、皇位継承を巡る愛憎と運命に翻弄され、1156年保元の乱に敗れた崇徳上皇の、流罪の地・讃岐での孤独、望郷、絶望の日々に、時代の思想・極楽往生を説く西行を渾身の力で拒否し、闍提(せんたい)の道を選んだ魂の主人公・崇徳上皇の850年の時を経て今なお癒えることのない無念を鎮める鎮魂曲(レクイエム)。「成るは成就なり」(世阿弥)。

◆ あらすじ

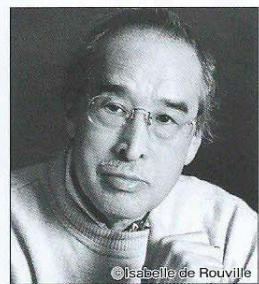
第一幕(一場～三場) 平安時代の華やかな文化の陰に潜む陰謀と策略、その歯車に巻き込まれ、讃岐に流され、苦悩の生涯を終えた崇徳上皇の怨みは深く、その亡霊は樵(きこり)に輪廻し、都より「白峯御陵」に供養に来た西行に淡々と語る。

第二幕(四場～十場) 史実を元に自由に再創造された幕で、院政を始めた白河法皇、崇徳の父帝である鳥羽上皇と待賢門院璋子(たいけんもんいん たまこ)の入台の儀、待賢門院と白河法皇の情事、鳥羽上皇と第二夫人美福門院得子(びふくもんいん なりこ)との間に生まれた體仁(なりひと)親王(のちの近衛帝)、美福門院のわが御子に対する愛情が引き起こす日本で最も残酷であった保元の乱。崇徳側の敗北と破滅のエピソードが歌われ、演じられます。

第三幕(十一場～十二場) 再び現れた崇徳の霊は、女院・後白河側の対処が如何に非人道的で天の道に反するかを西行に訴える。そして救いのない大魔縁となって復讐を繰り返す闍提(せんたい)の道を選んだことを伝え、大炎閃光に包まれた崇徳の本当の姿を見せる。西行はねむりから覚め、全て見たことは恐ろしい悪夢であったことを知り、再度読経に専念し、コーラスもそれに加わり、このレクイエムは終わりとなる。

※第一幕と第三幕は夢幻能(現世の者でない者が出てくる場面)形式、第二幕は現在能(現世の者達のみで成り立つ場面)形式

● 作曲家プロフィール



丹波 明

(作曲/音楽学)

1932年横浜生まれ。東京藝術大学作曲科卒業後、60年フランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院に入学し、オリヴィエ・メシアンに師事。

作曲で一等賞、リリー・ブーランジェ賞、ディボヌヌ・レ・バン賞等を受賞。

64～67年フランス国立放送研究所にて「具体音楽」研究に従事。
68年フランス国立科学研究所哲学科に入り、98年主任研究員に就任。
70年以降、作曲、音楽学の二分野で活躍。
録音はピアノ協奏曲(曼荼羅)、チェロ協奏曲(オリオン)、弦楽四重奏(タタター)等。
音楽学の分野では71年「能音楽の構造」によりソルボンヌ大学より音楽博士号、日本翻訳家協会文化賞、84年『日本音楽理論とその美学』により同大学よりフランス国家博士号を授与される。日本で出版された著書には「創意と創造」「序破急」という美学(音楽之友社)がある。
2012年、パリ在住50年の記念公演が行われ、好評を博した。

● 出演



崇徳上皇
大野徹也
(テノール)



西行法師
大塚博章
(バリトン)



白河法皇
加賀清孝
(バリトン)



鳥羽上皇
中鉢 聡
(テノール)



待賢門院
伊藤 晴
(ソプラノ)



美福門院
飯田みち代
(ソプラノ)



藤原頼長
大久保光哉
(ハイバリトン)



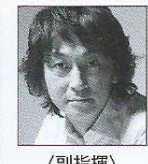
藤原忠通
草刈伸明
(バリトン)



〈管弦楽〉セントラル愛知交響楽団



〈指揮〉井崎正浩



〈副指揮〉橘 直貴



原田 節
(オンド・マルトノ)



市橋若菜
(オンド・マルトノ)

白峯セントラル愛知合唱団

〈合唱指揮〉中村貴志

〈演出〉池山奈津子

〈構成協力〉木村俊光



侍従
滝沢 博
(バリトン)



乳母Ⅰ
杉浦愛美
(メゾ・ソプラノ)



乳母Ⅱ
本田美香
(ソプラノ)



武士Ⅰ
迎 肇聡
(バリトン)



武士Ⅱ
山本康寛
(テノール)